

【Khaṇḍana bhava-bandhana】解説⑦

ニールバヤ ガターシャームシャヤ ドウリハ ニースチャヤ マーナシャ ヴァーン
7.Nirbhaya gata-samśhaya ḍṛirha- niśhchaya mānasa-vān

恐れがない なくなる 疑い・混乱 とても厳しい 必ずやる 心 持っている

ニッシュカーラーナ バカター シャラナ ティヤジ ジャティ クラマーン
Niṣhkāraṇa bhakata-śharaṇa (×2) tyaji jāti- kula-mān

理由は無い 信者たち 避難所 やめる 高いカースト 高い家族や有名な人

<賛歌集の訳>

誕生と種族の誇りを持たず、あなたの普遍の愛は求める全ての信者に避難所を与える。あなたの心はあらゆる恐れを超え、あらゆる疑いを去り、断固たる決意を秘めていらっしゃる。

<内容>

恐れが全くなく、すべてのものを完全に放棄したお方。
決めたことは必ず貫き通し、たとえ信者でなくても助けを求める人全てに救いの手を差し伸べてくださる。
家柄や身分の上下は考えず、まったくうぬぼれがないお方。

<語句解説>

Nirbhaya : ※1.Ni (無し) +bhaya (恐れ・恐怖) 恐れが無い

gata : なくなる

samśhaya : ※2. 疑い。混乱。

ḍṛirha : ※3. とても厳しい

niśhchaya : 必ずそうする。

mānasa-vān : ※4. mānasa 心 +vān 持つてる

Niṣhkāraṇa : Ni 無い +kāraṇa 原因

bhakata-śharaṇa : ※5. bhakata 信者たち +śharaṇa 避難所

tyaji : やめる (通常は「放棄」の意味)

jāti : 高いカーストの人

kula-mān : ※6. kula 高い家族・家柄、mān 有名な人

<注釈>

※1. Nirbhaya : 恐れがない。

「恐れ」はどうして起こるか? ⇒ 「無知」があるから起こる

物、人への執着がある間は「恐れ」は無くならない。「恐れ」は、お金、家族・友達など「物が無くなること、人と離れること」への不安から起こる。何も心配

がないという人も、生きている限り体への執着があるので死ぬ恐怖はある。
もし体の執着がなくなれば死ぬ恐怖もなくなる。

「恐れ」がなくなるのはいつか？⇒「執着」がなくなった時

Ni（無い）+bhaya（恐れ・恐怖）＝「恐れが無い」という意味

同様に

Vi（無い）+rāga（執着）＝vairāga（ヴァイラッグヤ）＝「無執着」

お坊さんの事を「ヴァイラギ」と呼ぶのはこれから由来している。

お坊さんの事は、他にも「サンニャーシ」「サードウ」と呼ぶことがある。

<参考>

Ni、Vi、A は接頭辞で、「無、非」の打ち消しの意味

Nirbhaya と Abhaya、Vairāga はそれぞれ「無執着」の意味

接頭辞 Ni（無）+Bhaya（恐れ・執着）＝Nirbhaya

接頭辞 A（無）+Bhaya（恐れ・執着）＝Abhaya

接頭辞 vi（無）+rāga（恐れ・執着）＝Vairāga

「ヴァイラッグヤ・シャタカム」（Bhatrighari 著）という「100の無執着」が書かれている有名な聖典があり、そこにはいろいろな執着の状態でいろいろな恐れが出るという例がたくさん書かれている。

① 「ボーゲー・ロゴ・バヤン」

たくさんの世俗的な楽しみ（ボーゲー）をすると、病気（ロゴ）になる恐れがでてくる。例）飲みすぎで肝臓を悪くするなど

② 「クーレー・チュテ・バヤン」

ハイクラスの家族も、家族のだれか一人でも問題を起こすと地位がさがる。

③ 「ヴィッター・ビパーラ・バヤン」

金持ち（ヴィッター）は王様（現代は政府）から所得税として沢山お金を取られる恐れがある。また泥棒、銀行強盗などにお金を取られる恐怖。

また、名声欲を沢山持っている人（有名人、ライター、歌手など）は批評家からのレビューで批判されることを恐れる。

④ 「バーレー・リプ・バヤン」

力が強い人は自分より強い人が現れ、自分が負けるのを恐れる。

⑤ 「ルペ・ジャラヤー・バヤン」

美人は年をとることを恐れる。

⑥ 「シャストレ・バディ・バヤン」

有名な学者は自分より博学な人が現れること、議論で負けることを恐れる。

⑦ 「グネー・カラ・バヤン」

良い性質の人は、他の人から嫉妬されたりなど、人からの批判を恐れる。

他の人が自分をどう見ているのかすごく気にする。

⑧ 「カエー・タンタ・バヤン」

肉体意識がある間（生きている間）死の恐怖がある。

【結論】

「サルヴァー・ポストウ・バヤン・ニタム・ブヴィーニタム」

→全てのはすべての状態で恐れがある。

「ヴァイラッギャン・エーヴァ・バヤン」

→「ヴァイラッギヤ（無執着・放棄）だけで人は恐れがなくなる」という意味。

シュリー・ラーマクリシュナはすべてのものを完全に放棄していたので、ニルバヤ（Nirbhaya）、アバヤ（Abhaya）、ヴァイラッギヤ（Vairāga）だった。

普通「私は無執着です」という時は、お金、女、服などへの執着がない事を言う。しかし執着の源は「私は体・心」という思いからなので、それらは本当の無執着とは言えない。

本当の無執着・放棄は「私は体・心が無い」とそこまで思えること。

そうなれば恐れがなくなり、ヴァイラッギヤ（無執着・放棄）となる。

その段階であれば、体意識がないのでお金や富をたくさん持っても構わない。ただ体意識がある時に全部放棄しても意味がない。仮に全部放棄して森に入ってお坊さんになったとしても、それは「外の放棄」であって「中の放棄」ではないので本当のヴァイラッギヤではない。

お坊さんは外と中と両方の放棄が大切。

家従者は外の放棄はできないので中の放棄が大切。

しかしすべてを放棄しお坊さんになっても、**体がある（生きている）以上「体意識」があるので「死の恐怖」がある。**

それでは、ヴァイラッギヤはいつできるか？

どんなに願っても、頭だけで理解しただけではそれはできない。たくさん実践しないと、一時的な放棄をしたとしても安定した放棄をしないとできない。

「体意識」は生まれてから死ぬまで、またたくさんの前世で「体・体・体」と繰

り返してきたとても強い意識なので、何度聞いても印象は深くならない。
しかし、初めは全く印象が出なくても、何度も何度も聞いて聖典の勉強を続けて実践していけば、少しずつ、絶対に結果は出るので無駄ではない。

例) ガラス製のインクポットを洗う時のように、きれいな水で何度洗ってもインクの黒い水が出てくるが、繰り返していくうちにだんだんきれいになっていく。時々我々は霊的な実践をしても結果が出ないと失望するが、このように、今は全然わからなくても絶対結果は出ている。大切なのは、決してやめないで続ける事。

そのために、求道者には3つのポイントが必要である。

① 信仰 faith → ② 忍耐 perseverance → ③ 決意 determination

このような順番で、決してやめないで粘り強く続ければ、必ず結果が出る。

「立ち上がれ、目覚めよ。ゴールに達するまで決してあきらめるな」というスワミジのメッセージを忘れない。そうすればやがて

否定的な表現で「体意識がなくなる」

肯定的な表現で「魂意識が出てくる」

これが本当のヴァイラッグヤでありニルバヤである。

※2. samśhaya : 疑い。混乱。例としては

- ・ 神様はいるのかいないのか？
- ・ 神様は形があるのか無いのか？
- ・ 神様はどんな形が正しいのか？
→ シヴァ？カーリー？ドゥルガー？ガネーシャ？アラー？ゴッド？
バガヴァン？クリシュナ？など。
- ・ 神様には性質があるのかないのか？
- ・ 聖典は何が正しいのか？→キリスト教では聖書だけが正しい。
イスラム教ではコーランだけが正しい。
ヒンズー教でヴェーダとは「普遍的な真理」なので、コーランや聖書も包括的な意味でヴェーダとみなす。(ヴェーダウパニシャッド、カルマカンドダだが)
- ・ 私の本性は？私は誰？私は体？心？意識？
- ・ 宇宙の本性は？
- ・ 目に見えるものは実在なのか？
- ・ 人生の目的は何？お金？名声？楽しみ？

<哲学的な4つの疑い>

① 自分について

- ② 宇宙について
- ③ 神について
- ④ 自分と宇宙と神の関係について

例) 私と親戚の関係は?→とても親しい関係だがいつかなくなる。

例) 夫婦は?結婚前は見ず知らずの二人だが、結婚し、やがてなくなる。

全ては「始まり」があり「終わり」がある。

時々妻は、夫と死別してもまた同じ旦那さんと一緒になりたいと思う事がある。インドでは、生まれ変わっても同じ人と一緒になりたい、一緒に天国に行きたいと思う妻が、夫を火葬する際、一緒に自分も焼かれることがあった。

・本当の人と人の関係は?

宇宙は神様が作ったので、私たちの母であるが、神様がどのように私たちが愛してくれているかはわからない。時々私たちはとても辛い経験をするので、神様は愛してくれていないと疑ってしまう。

しかし、

- ・浅い考えの人には疑いはない。(これが「普通の人」)
- ・悟った人にも疑いはない。
- ・まだ悟っていない「真ん中の人」は生きていくのが大変。

もし「真ん中の人」が「普通の人(浅い考えの人)」に戻りたいならそれも構わないが、「福音」に書かれているように、神様は猛毒の蛇のようで、一度噛まれたら必ず死ぬ。そのように一度でも神様のことを深く思った人は、普通の人には戻れない。

シュリー・ラーマクリシュナは悟った人でもあり、神の化身でもあるので疑いは何もない。しかし神様も人間の形で現れるとまた疑いが生じる可能性もある。例えばスローミー・ヴィヴェーカーナンダは七賢の一人で、悟った人だが「神はいますか?」と何度も疑っていた。

このように神様が人間の形で生まれるのは、人々へ教えるために人間の経験(苦しみや悲しみの経験)が必要だから。それがどれほど大変か、その経験があつて初めて慈悲(Sympathy)が出て、人々を教えることができる。

また、全ての疑いがなくなった人は、他の人の疑いも取り除くことができる。普通悟った人は自分の疑いをなくすだけだが、シュリー・ラーマクリシュナは人類の先生であるから、自分だけではなく、他の人の疑い *samśhaya* も取り除くことができる。

※3. 我々が自分で決めたことを実行できないのは心が弱いから。
しかしシュリー・ラーマクリシュナは一度決めたことは必ず貫いた。
人生の目的は「一時的なもの」ではなく「永遠なもの」だと知っていたので、
お金や富などすべて「一時的なもの」は放棄した。
例えば福音の中の話に、シュリー・ラーマクリシュナはお金を触っただけで手
がねじ曲がってしまった話がある。また、ベッドの下にお金を隠された時も、
お金のことは知らなかったが体中痛くて寝られなかったとある。
このように 100%放棄していた。
また「何かを確かめたかったら、真理を確認できるまでやめないで続ける」と
いう特徴もあった。
例えばマザー・カーリーの礼拝の時、「この女神像は像だけなのか、その中に本
当の神がいるのか」確認したかった。その真理を確かめるため、シュリー・ラー
マクリシュナは 12 年位いろいろと確認し続けた。

※4. Mānasa (心) は、māna と書かれることもある

※5. シュリー・ラーマクリシュナは、たとえ信者でなくても助けを求める人には
みな、理由がなくても見返りがなくても、お慈悲だけで皆を助けてくださる。

※6. シュリー・ラーマクリシュナは高いカーストのブラーミンだったが、家柄
や身分の上下は考えず、まったくうぬぼれがなかった。